

仙石山仏教学論集
第8号（平成28年）

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. VIII, 2016

中国南北朝時代における煩惱論
——『勝鬘經』の諸注釈書を中心として——

楊 玉飛

中国南北朝時代における煩惱論 ——『勝鬘經』の諸注釈書を中心として——

楊 玉飛

はじめに

問題の所在

『勝鬘經』は古来より人口に膾炙した經典の一つである。五世紀に漢訳されて以来、東アジアにおいて幅広く大流行した。特に中国では、『勝鬘經』に対する研究の歴史はかなり長く、多くの注釈書が作られたり、研究されたりしてきた。

『勝鬘經』は在家の女性が仏に代わって法を説くという特異なストーリーであり、今までの經典にない大胆な発想で、在家主義を標榜する大乘仏教の真骨頂を表すものである。このような經の形式上の特異性は別にして、近年『究竟一乘宝性論』についての研究に伴って、本經のインド如来藏思想史上における位置も明らかにされるに至ったのである。即ち、『勝鬘經』は、如来藏を説く一群の經典群の中にあって、インド仏教における如来藏思想を形成する三つの重要な經典—『如来藏經』『不增不减經』『勝鬘經』—の一つとして重要視されている。特に、『勝鬘經』が持っている特殊な煩惱論は重要視され、今日に至るまで種々の研究が行われてきている。例えば、『勝鬘經』の煩惱説の成立については香川孝雄氏「『勝鬘經』における煩惱説の成立」¹があり、『勝鬘經』独自の煩惱論については柏木弘雄氏

¹ 香川孝雄は「『勝鬘經』における煩惱説は一群の如来藏関係の經論以外には、あまり見当たらないところであるが、しかしながら、その成立については、アビダルマ仏教における煩惱論とは密接な関係を有しており、部派の教学を抜きにしては考えられない」と指摘している。(香川孝雄「『勝鬘經』における煩惱説の成立」『浄土教の思想と文化：恵谷隆戒先生古稀記念』1972, p. 1046.)

『勝鬘夫人のさとり』²がある。これに対し、『勝鬘經』の煩惱論を中国仏教学者（南北朝時代）がどのように受容し、どのように解釈してきたかという研究は未だ殆ど行われていない。ここで取り上げたのは中国南北朝時代における『勝鬘經』の諸注釈書であって、これらの注釈書を検討することによって、インド仏教所産の『勝鬘經』の煩惱論が中国仏教においてどのように理解され、どのように発展し、また、中国仏教思想史のうえでどのような役割を担っていたかということを究明したいと考える。

研究の方法と範囲

中国仏教はインド仏教の受容に際し、多分に偶然性に依存したことと、仏教伝入以前に自国に高度な文化が存在していたことによって、インド仏教とはかなり異質な発展をとげてきた。そして、中国的変容を受けて受容されたのである。それゆえ、中国仏教における『勝鬘經』の理解を検討するために、まず『勝鬘經』の梗概を示し、次に時代範囲を中国南北朝（420年頃から589年頃まで）に限定し、『勝鬘經』の六種の注釈書を取り上げた。なぜなら、隋唐以降の注釈書（吉藏の『勝鬘宝窟』や、基の『勝鬘經述記』）は現存しており、かなり研究されていたからである。本稿で取り上げたのは、以下の六種の注釈書である。

- A 本 『挾注勝鬘經』卷上 (S.05858 + S.01649)
- B 本 北魏正始元年 (504) 写 慧掌蘊『勝鬘義記』一卷 (S.02660)
- C 本 六世紀中葉写 無名氏『勝鬘經疏』 (S.06388、BD02346)
- D 本 高昌延昌四年 (564) 写 照法師『勝鬘經疏』 (S.00524)
- E 本 敦煌本『勝鬘義疏本義』 (BD04224 [玉 24、北 113]、BD05793 [奈 93、北 114])
- F 本 淨影寺慧遠 (523-592)『勝鬘義記』卷下 (卷下 : P.2091 + P.3308)

これらは、近年まで全く知られていなかった敦煌出土の注釈書写本で、研究も基礎的なものにとどまっている。例えば、藤枝晃氏は「北朝における『勝鬘經』の伝承」の論文において、この六本の注釈書それぞれの、外形

² 柏木弘雄『勝鬘夫人のさとり』春秋社、1997、pp. 152-163.

上と内容上との特徴を紹介している。古泉圓順氏は「敦煌本『勝鬘義疏本義』」において、六本のうちの一本である『勝鬘義疏本義』の外形的特徴と内容上の特徴を紹介した後、『本義』所依の『勝鬘經』本文、『本義』の伝承をも紹介した上、本文を校定している³。しかし、これらの内容研究については、まだなされていないので、研究する余地がある。さらに、これらは南北朝に書かれた全注釈書のほんの一部に過ぎないが、幸いに五世紀から七世紀初めにかけて書写年代が適当に散らばっているため、『勝鬘經』の独特な煩惱論に着眼した場合、この間における『勝鬘經』の煩惱論の発展過程の見通しをつけるのに、資料として決して乏しいということはない。これら六本の注釈書はどのように『勝鬘經』の独特な煩惱論を理解しているのか、そして発展させたのかを検討して、最後にそれらの検討結果をまとめて結論とする、という方法でこの論文を完成させたい。

六本の注釈書についての先行研究

先にも触れたように、この六本の注釈書についての研究はただ基礎的な面にとどまっており、思想的な研究はほとんど行われていないのが現状である。特に煩惱論は研究されていないのも同然である。

しかし、思想的な研究はほとんど行われていないとはいえ、全くない訳ではない。例えば、六本の中の一番時代の新しい浄影寺慧遠の『勝鬘義記』についての藤井教公氏の論文がある⁴。この論文は直接に煩惱を論じているのではなく、間接的に煩惱と関係のある如来蔵問題を論述している。浄影寺慧遠の『勝鬘義記』と吉蔵の『勝鬘宝窟』とを取り上げて、浄影寺慧遠は阿頼耶識を第八識とする八識説を前提とし、如来蔵縁起に立って本経を理解しているのに対し、吉蔵は三論の根本精神である無所得中道の上に立って理解していると指摘している。また、金治勇氏は敦煌発見の勝鬘經疏（奈93）について、四種生死説に着眼し、論じた結果として、この四種生死説は梁の三大法師の一人僧旻の説であることを指摘している⁵。

³ 古泉圓順「敦煌本『勝鬘義疏本義』」『聖徳太子研究』5, 1970, pp. 60-66.

⁴ 藤井教公「『勝鬘經』の世界——中国如来蔵思想史研究の手がかり——」『横浜市立大学論叢人文科学系列』34-1, 1982, pp. 25-49.

I. 『勝鬘經』の煩惱論

『勝鬘經』は『如来藏經』、『不増不減經』とともに如来藏思想を形成する中核となる經典であるが、本經は先行する二經の教理的不備を補い、如来藏思想を完成させようとする意図をもった經典である。それは、本經に至って始めて説かれたいくつかの新しい教理が、これまでの如来藏説において不備であった点を補い、また理論的に整備しようとしたものであるということから伺うことができる。これらの新しい教理の一つは無明住地の煩惱と、その煩惱によってうける三界の外の生死輪廻である不思議変易生死である。本經は一乗章において煩惱論を展開し、従来になく無明住地という煩惱を創り出した。その煩惱は、あらゆる煩惱の基礎となり、最も根源的でその始めが知られないもの、そして仏のみが断じることのできる煩惱であるとした。二乗は修行によって凡夫の身体をうけて輪廻すること（本經はこれを分段生死と呼ぶ）を免れても、まだ無明住地の煩惱を断じていないから、その煩惱の業の果報として意生身（意によって化生せられた身体）を三界の外においてうける（これを変易生死と呼ぶ）。この意生身をもって菩薩行を修行して仏果に至ると説くのである。

以上のように、本經は煩惱については無明住地という煩惱とそれによってうける三界を出離した後にはうける不思議変易生死という輪廻を創出したが、それは二乗を救済するための論理的要請の産物であった。つまり、本經の一乗章には、

阿羅漢辟支佛有怖畏。是故阿羅漢辟支佛。有餘生法不盡故。有生有餘梵行不成故。不純事不究竟故。當有所作。不度彼故。當有所斷。以不斷故。去涅槃界遠（『大正藏』 vol. 12, p. 219c1-5）

とある。書き下せば、「阿羅漢と辟支佛とは怖畏有り。是の故に阿羅漢と辟支佛とは、餘の生法の盡きざる有り。故に生有り、餘の梵行有りて成ぜざるが故に純ならず。事、究竟せざるが故に當に所作有るべし。彼を度ら

5 金治勇「敦煌発見の勝鬘經疏（奈 93）と勝鬘經義疏との比較研究（2）——主としてその学系について——」『印度学仏教学研究』37, 1970, pp. 270-273.

ざるが故に、當に所斷有るべし。斷ぜざるを以ての故に、涅槃界を去ること遠し」となる。つまり、阿羅漢と辟支佛はまだこの世の存在に対して怖れがあり、生死の法を完全に尽しておらず生死を超えていない。また修行も完全になしえていないので、まだ断すべき煩惱が残っており、眞の涅槃からはほど遠いとするのである。すなわち、まだ断すべき煩惱がある限り、輪廻の世界から脱しておらず再生の可能性があるということである。一般には阿羅漢と辟支佛は煩惱を断尽して輪廻から脱し、再び三界内には生まれてこないとされているのに、本經はなぜ、彼ら二乗には再生の可能性があるとしたのであろうか。それは、彼ら二乗を救済して仏とならせようとする意図から出たものなのである。彼ら二乗がこのまま再生しない限り、彼らはもはや仏縁に触れるチャンスがない。それでは彼らは永遠に仏となることはできず、そうなるとすべての衆生を仏とならせるという本經の一乗思想を貫きえなくなってしまうわけである。このように、二乗をも救済するためには、彼ら二乗をどうしても再生させる必要があったのである。しかし、通例では、阿羅漢と辟支佛の二乗は三界を出離して、もはや再生しないとされているから、ここに従来の通念と抵触しないように彼ら二乗を再生させるためにはどうしても新たな理論が必要であった。これは『勝鬘經』の独自の煩惱論である。独自の煩惱論とはいえ、無から生み出されたものではなく、きっと何かによって創出されたに違いない。香川孝雄氏は、「『勝鬘經』の〈煩惱説〉はたしかに分別論者の思想的影響下に成立したということができよう」⁶と指摘している。さて、本經の煩惱論に入る。經には、

何以故有煩惱。是阿羅漢辟支佛所不能斷煩惱有二種。何等為二。謂住地煩惱。及起煩惱。住地有四種。何等為四。謂見一處住地。欲愛住地。色愛住地。有愛住地。此四種住地。生一切起煩惱。起者剎那心剎那相應。世尊。心不相應無始無明住地。世尊。此四住地力。一切上煩惱依種。比無明住地。算數譬喻所不能及。世尊。如是無明住地力。於有愛數四住地。無明住地其力最大。譬如惡魔波旬於他化自在天色力壽命眷

⁶ 香川孝雄 前掲論文、p. 1061.

屬衆具自在殊勝。如是無明住地力。於有愛數四住地。其力最勝。恒沙等數上煩惱依。亦令四種煩惱久住。阿羅漢辟支佛智所不能斷。唯如來菩提智之所能斷。如是世尊。無明住地最為大力（『大正藏』 vol. 12, p. 220a01-a15）

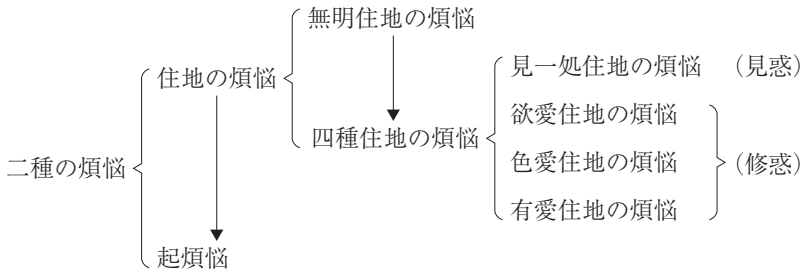
とある。書き下せば、

何を以ての故に、煩惱有り。是れ阿羅漢と辟支佛との斷ずること能わざる所なり。煩惱に二種有り。何等をか二と爲す。謂わく、住地の煩惱及び起の煩惱なり。住地に四種有り。何等をか四と爲す。謂わく、見一處住地と欲愛住地と色愛住地と有愛住地となり。此れ四種の住地は一切の起の煩惱を生ず。起とは剎那心の剎那に相應する。世尊、心不相應とは無始の無明住地なり。世尊、此れ四住地の力は一切の上煩惱の依種たれども。無明住地に比するに、算數譬喩に及ぶこと能わざる所なり。世尊、是くの如き無明住地の力は有愛と數の四住地に於いて、無明住地は其の力最大なり。譬えば、惡魔波旬は他化自在天に於いて、色力・壽命・眷屬・衆具の自在殊勝なるが如く、是くの如く無明住地の力は有愛と數の四住地に於いて、其の力最勝なり。恒沙に等しき數の上煩惱の依なり。亦た四種の煩惱をして久しく住せしむ。阿羅漢と辟支佛の智は斷ずること能わざる所なり。唯だ、如來の菩提智のみ能く斷ずる所なり。是くの如く世尊、無明住地は最も大力と爲すとなる。つまり、起煩惱、見一處住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地、無明住地という六種煩惱を立て、これらの煩惱と心との関係において論を展開していくのである。住地とは「一切の上煩惱の依種」とされ、したがって、住地煩惱とは、一切の煩惱を生ぜしめる大地の如き煩惱と考えられる。そして、住地煩惱に五種が立てられるが、無明住地は、ほかの四住地と働きが異なるから、別説されるのである。

まとめると、見一處住地は、見惑すなわち我見我所見などの三界に通じておこる煩惱を示し、見道によって一處に斷じられる如き煩惱を言うのである。欲愛住地、色愛住地、有愛住地の各住地は、修惑にあたり修道によって斷じられるもので、欲愛住地は、欲界において生ずる煩惱すなわち五欲に執する煩惱を言い、色愛住地は、色界すなわち欲を斷ずれどもその元

たる色身に執して生ずる煩惱を言い、有愛住地は、三界の無色界で前二界を禪定によって断尽するも心に執して生ずる煩惱を言うのである。このような見惑、修惑と言われる四住地煩惱によって、衆生の起こる顛倒とも言うべき執着が生ずるのであり、この衆生における現起の煩惱を起煩惱と言うのである。

この四住地と起煩惱と無明住地の構造を図示すると、次のようである。



II. 六本の注釈書の概観

ここで取り上げるのは『勝鬘經』の諸注釈書である。以下は藤枝晃氏による整理⁷に依拠して、現存する南北朝500年頃の『挾注勝鬘經』から隋の慧遠の『勝鬘義記』にかけての各テキストの書誌情報を一部省略改変して掲げたものである。

A 本 『挾注勝鬘經』 卷上 (S. 05858 + S. 01649)

残存部分は、『大正藏』本の經文で言えば、vol. 12, p. 219a27-p. 220b5に当たる。S. 01649は全長12尺、首部を欠く断簡で、薄手の黄紙に書かれる。別の小断片S. 05858は卷子の上半部だけ10行を存するが、S. 01649の首部に接するものである。經の本文は毎行15字に書き、処々に毎行22-24字の小字で双行注を施している。書体は西紀500年に降るものではない。注釈内容は、字や語の訓詁はむしろ少なく、文章全体の意味を解くという

⁷ 藤枝晃「北朝における『勝鬘經』の伝承」『東方学报』40, 1969, pp. 332-347.

行き方で、特に文中にしばしば見える「何以故」は、ほとんど一々について解説する。もっとも注意すべき点は、この注釈が分章についての考えを持っていないことである。勿論注釈の中には大きな段落とも呼ぶべきものを考えていることを示しているが、それは A 本以外の写本に見える分章とは全く異質のものである。何よりもこの本の上巻の区切り場所がそれを示している。この場所は A 本並びに諸注釈書の一乗章の中途にあたり、その考え方からすれば、全巻を二つに分ける場所としては落ち着きが悪い。

B 本 北魏正始元年 (504) 写 慧掌蘊『勝鬘義記』一卷 (S. 02660)

S. 02660 は首部を欠き、今 17.5 尺を存する卷子、毎行 30 字余り、407 行を存する。この巻は、11 紙よりなると記すが、写真で判断すると、10 紙を存するものようであるから、欠損部分は極めて僅かである。書写年代は正始元年で、つまり西紀 504 年にあたる。表題は「勝鬘義記」とある。この写本に限らず、北朝期の注釈書は、経題のあとに「義記」もしくは「義疏」を加えて呼ぶのがもっとも普通である。文字の訓詁ではなく、文義の疏通を旨とする、という心持らしい。注釈の方法は、経の本文をまず十五の経 (= 章) に分け、各経 (= 章) ごとの大意を数句で述べ、然るに本文中の難句要句を順にいくつかを挙げて、いわば、きわめて簡潔な注釈である。ここに「経」と呼ぶ区分は、ほぼほかの本の「章」にあたるが、後世の章のように標題をもたず、各「経」の首句を題とする。そして最後の第十五経 (= 章) は、『大正蔵』vol. 85, p. 223a の中の三句を挙げて解説するだけで終わる。

C 本 六世紀中葉写 無名氏『勝鬘經疏』(S. 06388, BD02346)

S. 06388, BD02346 両本とも首欠尾欠で題記等はなく、S. 06388 は 1029 行、BD02346 は 217 行が残存し、後者は前者の第 284 行から第 540 行までに相当する。S. 06388 を底本、BD02346 を対校本とし整理した翻刻は『蔵外地論宗文献集成続集』に収められている。S. 06388 の 12 行目に経文の解説が見え、巻尾は流通説の半ばまで及んでいるので、欠損部分はきわめて少ないわけである。字体によるだけでは、断定できないが、六世紀中葉、あるいはそれより若干遡るかという書体である。首部に序論の部分が 10 行ばかり見える。かなりくどい説き方であるから、序論も少なくとも 2、

3紙の分量をもっていたものと思われる。続いて「正宗分」は十五の章に分かれ、章題は流通説に言うところをとるので、他の諸本のそれと小異があり、区切り場所は必ずしも一致しない。そして経文の末尾40行ばかりを「第三流通説」とする。したがって、その前は「第二正宗分」「第一序説」となっていたわけである。注釈方法は、各章ごとに、初めにその章の意味を簡単に説き、次に分段を示して、然る後に文意を解釈する。後半の短い諸章になると、分章と分段とがまちまちになるという奇妙な形を呈する。これは、明らかに、系統の異なった先人の諸注釈書を集めて作ったものである。

D本 高昌延昌四年(564)写 照法師『勝鬘經疏』(S.00524)

首部を欠く卷子本で、全長40尺、毎行の字詰30字ばかりの小さな字で、782行を存する。写本の巻末に書かれた識語についていささかな説明を必要とする。「照法師疏」とある識語によって、照法師なる人がこの疏の撰者であることが明白であるが、その照法師がどこの人か、いつの人か、完名は何というのか、全く知ることが得ない。そして、「延昌四年」の識語は高昌国の延昌四年、つまり西紀564年と解すべきである。北魏の延昌四年、つまり西紀515年と解すべきでない。この本の注釈方法は全体としてC本にかなり似ていて、それよりやや詳細である。E本と似た句が所々にあらわれるのも注意してよいことである。この本も本文を十五章に分ち、そのあと末尾40行を「流通説」とすることはC本と同じく、十五章の区切り方もほとんど変わりはない。ただ、区切り場所が少しく異なるだけである。このことから、C、D両本は、あまり離れない時期に、近い系統の学派によって作られたと考えられる。

E本 敦煌本『勝鬘義疏本義』⁸(BD04224〔玉24、北113〕、BD05793〔奈93、北114〕)

『敦煌劫余録』によれば、奈本は36紙を存し、玉本は13紙を存するという⁹。奈本は首部を欠くだけで、尾部は経の末尾までの注釈があり、あ

⁸ 古泉圓順 前掲論文、pp. 59-141.

⁹ 『敦煌劫余録』冊2、第1帙、10丁裏。

と半紙の余白があるから、欠失はないようであるが、尾題も識語もない。残存部分の初めには第二章の末尾数行が見え、以下流通説まで 860 行を数え得る。つまり、欠失部分は序説、第一章、及び第二章のほとんどということになる。玉本は首尾とも欠け、いま 310 行を存するが、その内容は第五章の半ばすぎより流通説の始まる所まで、奈本にひきあてると、その第 508 行より第 874 行にあたる。両本とも毛筆書きの達筆の行書である。この本の注釈方法には、甚だ特異なものが認められる。経の末尾の所謂「流通説」の部分の注釈に「第三流通説」という語があるから、欠失した首部は、他本のごとく、「第一序説」「第二正宗説」と分かれていたことが理解できる。そして、「第二正宗説」を十余章に分けること、その各章につけられた標題も他本と変わるものではない。しかし、他本が十五章に分けるのに対して、この本は表面上は十四章（最後の勝鬘章を欠いている）に分けるが、第七如来蔵章、第八法身章は章題を挙げ、「更無別文」というだけで、本文を持っていない。つまり、十二章となる。即ち、第六章以下の後半部を他本は九つの短い章に分けるのに対して、この本は六つの章に分ける。各章はそれぞれ一応の分量をもつ。C、D 両本の場合は、各章をいくつかの大段落に分け、大段落を中段落に、それをまた小段落に分けたが、この本はその小段落をさらに二重か三重かの小段落に分け、結局 8 字の 2 句か 4 字の 1 句の小節、極端な場合はただ 2 字の句にまで分解する。そうした手法は C、D 両本にもかなりの程度まで認められるが、この本では、それが極点まで行われている。これに対して、吉蔵らの南朝系注釈書には、ここまでの段落の細分は見られない。もう一つ、この本に関して極めて重要な一事がある。それは上宮王聖徳太子の作と伝えられる『勝鬘義疏』がこれとごく相似た内容のものであるということである。上宮王本は全体から言えば、この本より短いが、その中の文句の大部分はこの本の中に見出される。数量でそれを表せば、上宮王本の第三章以下は『大正蔵』で約 1800 行になるが、その内容でこの本の現存部分と無縁の文は 50 行ばかりに過ぎない。上宮王本では、段落の細分化が E 本ほど徹底していない。特に注意を要するのは、章の分け方など E 本の説を改めた箇所、そこでは、「本義云……」として、E 本の句を引用した上で、「今不須」などと

否定してから、自説を述べる。そのような記述が十四か所にあり、また、二、三か所だけ「一云」として、E本の文句と他の説明とを並べ掲げる例がある。そのほかはすべてE本に従う。この手法はやはり上宮太子の『法華義疏』と梁の宝雲の『法華經義記』との関係と全く同じである。

前にも述べたように、当時の注釈書は「義疏」または「義記」と題するのが通例で、中には両様の称をもつものもあったようである。例えば、この「本義」について、金治勇、望月一憲の諸氏より、「本義」は固有名詞と解すべきでなく、普通名詞、即ち「所依の本」と解すべきであると指摘された¹⁰。E本の場合もその通例であると思うが、現在の状態では決めようがない。今、他本との区別のため、仮に『勝鬘義疏本義』と名付ける。

F本 浄影寺慧遠（523-592）『勝鬘義記』卷下（卷下：P. 2091 + P. 3308）

今までその巻上が『続藏經』に収められて世に伝わるのみであったが、残本とはいえ、その巻下の写本が敦煌より見出されたので、かなりの所まで復元できるようになった。P. 2091は首部を欠き、23紙を存する。毎紙23行で、全部で629行の本文と5行の識語の尾題がみられる。その識語は次のようである。

P. 2091 識語

勝鬘義記卷下

釈慧遠撰之也

大隋 大業九年八月五日

沙門曇皎寫之、流通

後世、校竟也

經疏卷之下

識語には、上の通り、標題、撰者、写本の筆者、書写の年月日と一応のことが書かれており、ただ筆写の場所が知られないだけである。この写本の書かれた大業九年（613 A.D.）は撰者慧遠の没年（592 A.D.）より20年ばかり後に当たる。彼が『勝鬘義記』を作ったのは鄴都にいた時のように受

¹⁰ 藤枝晃氏は聖徳太子研究会学術大会（1968年12月7日、四天王寺女子大学）における研究発表の中で、『勝鬘本義』なる題名を撰したところ、金治勇、望月一憲の諸氏より、「本義」は固有名詞と解すべきでなく、普通名詞、即ち「所依の本」と解すべきであると指摘された。（藤枝晃 前掲論文、p. 349、注14）

け取れる。そうであるならば、著作はさらに二十年ばかり以前ということになる。

本文は毎行 25 字詰で、極めて端正な書体で典型的な楷書である。P. 3308 によって、P. 2091 の欠失の若干部分を補える。もし、この残巻が慧遠のものであるとすると、これにより欠失した「一乗章」の一部分が補えることになる。この章は極めて長文のものであるから、『義記』の闕文はまだ小さくはない。

この本の構成は、前 17 行が「序説」、末尾の約 40 行が「流通説」となり、中間の「正宗説」が十五章に分かれている。諸本と最も相違する点は、解説が今までのどれよりも煩瑣で、いわゆる五門分別なる手法まで見られることである。E 本の場合は区切り方も煩瑣であったが、これほど複雑な区切り方をしなかった。解説自体が格段に煩瑣となる。一面から言えば、博学ともいえるし、親切ともいえる。そして、この方式は吉藏の『勝鬘宝窟』にいたって、さらにその度を加えた。

上列の注釈書について、言わねばならないことは分章問題である。まず、『挾注勝鬘經』には分章はない。そして、正始元年（504）の年号のある『勝鬘義記』では、章分けがなされているが、『大正藏』所収の『勝鬘經』とは章題のつけ方は異なっている。すなわち、第四經（＝章）から第十四經（＝章）まで、章題には本文の首部の句を抽出して充てる。残りの四本の注釈書については、前半の六章までの分章は流通説に挙げる章題がそれぞれの段落にピッタリしているので、どの注釈書も章の分け方に変わりはない。区切り方の相違は後半にあらわれて、それは各書各様である。「法身」、「如来藏」、「聖諦」などの字句は經文の後半に入替わり立替わりであらわれるので、それらの章題を順に各段落にあてはめることは難しく、むしろ經文のどの段落にも、これらの題名はあてはめ得るという形になっている。各注釈家はそれぞれに、章の分け方に大変な苦心をした痕跡が見られる。

以上は諸注釈書の書誌情報を列挙したに過ぎないが、これからはその情報を踏まえて、検討していきたい。

III. 六本の注釈書の検討

1. 住地の検討

1-1. 住と地の解釈

A 本には、

各守已分爲住。能有所生爲地（『大正藏』 vol. 85, p. 279b17）

とある。書き下せば、「各已の分を守るを住と爲す。能く生ずる所有るを地と爲す」となる。

B 本には、

名永劫未除故名爲住。能生後心名之爲地（『大正藏』 vol. 85, p. 256b16-17）

とある。書き下せば、「永劫に未だ除かれざるが故に名づけて住と爲す。能く後心を生ずるを之れを名づけて地と爲す」となる。

曠劫來有字之爲住。能生不絶故名爲地也（『大正藏』 vol. 85, p. 256b20-21）

とある。書き下せば、「曠劫から有るを之れに字して住と爲す。能く生じ、絶えざるが故に名づけて地と爲すなり」となる。

四住地後斷名之爲住。以微在故還能生龜故名爲地也（『大正藏』 vol. 85, p. 256b24-25）

とある。書き下せば、「四住地は後に斷ずるを之れを名づけて住と爲す。微かに在るを以ての故に還た能く龜を生ずるが故に名づけて地と爲すなり」となる。

C 本には、

皆云住地者何也。倒相情立名住，住能生後名地，是以皆曰住地也

とある。書き下せば、「皆住地と云うは何ぞや。倒情の相立つるを住と名づく。住は能く後を生ずるを地と名づく。是を以て皆住地と曰うなり」となる。

D 本には、

始起一念能生名地。令後或相續不斷曰住。與住作地故名住地。（『大正

蔵』 vol. 85. p. 270a23-24)

とある。書き下せば、「始めに一念を起して能く生ずるを地と名づく。後或(惑)をして相續不斷ならしむるを住と曰う。住と地を作るが故に住地と名づく」となる。

剋此一念無明能生後或名地。後生煩惱不斷名住。(『大正蔵』 vol. 85. p. 270b04-05)

とある。書き下せば、「此の一念無明を剋して能く後或(惑)を生ずるを地と名づく。後生の煩惱は斷ぜざるを住と名づく」となる。

E 本には解釈が行われていない。

F 本には、

本爲末依。名之爲住。本能生末。稱之爲地(『新纂大日本統蔵経』 vol. 19. p. 882c18-19)

とある。書き下せば、「本は末の依と爲る。之れを名づけて住と爲す。本は能く末を生ず。之れを目して地と爲す」となる。

以上の住と地の解釈を見れば分かるように、住について、各疏各様で、地については各疏はほぼ同じ解釈をなされている。即ち、「能生」の義を取った。

1-2. 四住地の解釈

A 本には、

見一処 「妄執異理」即ち、異理を妄執する。

愛(欲・色・有) 「隨事染著」即ち、事によって染される。

B 本には、四住地については解釈されていない。

C 本には、

見一処 「四諦平等，更無異相，名爲一。爲解心栖託，名之爲處。

照達分明，謂之見。此惑從治道作名，故云見一處住地。亦可示相惑籠，

我見爲本。我者見之異稱，但於身上起見，故云見一處也」

とある。書き下せば、「四諦平等にして、更に異相無きを名づけて一と爲す。解心の栖託するを爲て、之れを名づけて處と爲す。照達すること分明

なるを、之れを見と謂う。此の惑は治道より名を作す。故に見一處住地と云う。亦た相の惑籠を示すべし、我見を本と爲す。我とは見の異稱なり。但だ身の上に於いて見を起す。故に〈見一處〉と云うなり」となる。

欲愛 「於自他法上皆愛著、是以偏得欲稱。唯感欲地果報、故曰欲」とある。書き下せば、「欲愛とは、自他法の上に於いて皆愛著す。是を以て偏に欲の稱を得。唯だ欲地の果報のみを感ずるが故に欲と曰う」となる。

色愛 「於淨報生貪也。於他無染、故闕欲稱」とある。書き下せば、「色愛とは、淨報に於いて貪を生ずるなり。他に於いて染無し。故に欲の稱を闕く」となる。

有愛 「無色染也。三中最細、得彼通稱、故曰有愛」とある。書き下せば、「有愛とは、無色（界）の染なり。三の中に最細なり。彼の通稱を得るが故に有愛と曰う」となる。

D 本には、

見一處 「三界見諦籠礦潤生義等見諦即斷故束爲一住地」（『大正藏』 vol. 85, p. 270a25-27）

とある。書き下せば、「三界の見諦は籠礦にして潤生の義等しは見諦もて即ち斷ずるが故に束ねて一住地と爲す」となる。

欲愛 「下界籠貪名爲欲愛住地」（『大正藏』 vol. 85, p. 270a27）

とある。書き下せば、「下界の籠貪を名づけて欲愛住地と爲す」となる。

色愛 「色界愛便名爲色愛」（『大正藏』 vol. 85, p. 270a27-28）

とある。書き下せば、「色界の愛を便ち名づけて色愛と爲す」となる。

有愛 「無色貪便説爲有愛住地也」（『大正藏』 vol. 85, p. 270a28）

とある。書き下せば、「無色の貪愛を便ち説いて有愛住地と爲すなり」となる。

E 本には、

有愛 「謂無色界惑」（古泉圓順 前掲論文、p. 93、l. 382）

とある。書き下せば、「謂く無色界の惑なり」となる。

色愛、欲愛、見一處の解釈はなされていない。

F 本には、

見一處 「五利煩惱推求名見。入見道時。一處併斷。名見一處」

とある。書き下せば、「五利の煩惱なり。推求を見と名づけ、見道に入る時一處に并に斷ずるを見一處と名づく」となる。

欲愛 「欲界地中一切煩惱。除无明見。説為欲愛。以此界中着外五欲。故名欲愛。理實欲界亦愛自身。着欲情多。故偏言之。又藺上界所愛色身。偏説欲愛」

とある。書き下せば、「欲界地の中の一切の煩惱なり。無明と見とを除きて説いて欲愛と爲す。この界中に、外の上五欲を着するを以ての故に欲愛と名づく。理實は欲界なり。亦た自身を愛す。欲に著する情多きが故に偏に之れを言う」となる。

色愛 「色界地中一切煩惱。除无明見。説為色愛。以此界中捨。外五欲。着己色身。故名色愛。理實色界亦愛己心。以此界中着色情多。偏説色愛。又藺无色愛著心故。偏説色愛」

とある。書き下せば、「色界地の中の一切の煩惱なり。無明と見とを除きて、説いて色愛と爲す。この界中に、外の上五欲を捨し、己の色身に着するを以ての故に色愛と名づく。理實は色界なり。亦た己心を愛す。この界中に、色に着する情多きを偏に色愛と説く。又无色の愛を藺んで、心に著するを以ての故に、偏に色愛と説く」となる。

有愛 「无色界中一切煩惱。除无明見。説為有愛。此若背下。應當説之為无色愛。若隨所取。應名心愛。今為破患。故名有愛。破何等患。

外道多取无色界中。以為涅槃。絶離心愛。今為破之。故説有耳」

とある。書き下せば、「無色界の中の一切の煩惱なり。無明と見とを除きて、説いて、有愛と爲す。此れ若し下に背かば、應當に之れを説いて无色愛と爲すべし。若し取る所に隨わば、應に心愛と名づくべし。今患いを破さんが爲の故に有愛と名づく。何等の患いを破するや。外道は多く無色界中を取って、以て涅槃と爲す。心愛を絶離す。今之れを破さんが爲の故に有と説くのみ」となる。

以上の解釈から見れば、見一處住地についての解釈は、各書各様である。A本では、「異理を妄執する」と解釈している。B本では、解釈はなされていなく、C本では、四諦平等で、異なる相がないことを「一」となし、

解心の栖託を「処」となし、照達して、明らかにすることを「見」となしている。D本では、三界の見諦は麤礦で、潤生の義は等しく、見諦をもって斷ずるので、「見一処」と言うのである。E本では、解釈されていない。F本では、五利の煩惱（身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見）を「見一処」となしている。欲愛住地、色愛住地と有愛住地についての解釈は各疏ほぼ同じで、即ち、欲愛住地を欲界の煩惱とし、色愛住地を色界の煩惱とし、有愛住地を無色界の煩惱としている。

1-3. 無明住地の解釈

A本には、

無明者直不識理

とある。書き下せば、「無明とは、直に理を識らず」となる。

B本には、

不識眞理稱曰無明

とある。書き下せば、「眞理を識らざるを稱して無明と曰う」となる。

C本には、

無明不如實知。邪分別心，亦是無明義。隨逐假名，亦是無明也。闍於所緣，名無明也

とある。書き下せば、「無明とは、如實知ならず。邪の分別心は亦た是れ無明の義なり。隨って假名を逐うは、亦た是れ無明なり。所緣を闍するを無明と名づくるなり」となる。

D本には、

無始者神識不起。則已起則託境。託境不了名曰無明

とある。書き下せば、「〈無始〉とは、神識は起きず。則ち已に起すれば、則ち境に託す。境に託して了せざるを名づけて無明と曰う」となる。

E本には、無明住地の解釈が行われていない。

F本には、

愚闇之心。躰无惠明。故曰无明

とある。書き下せば、「愚闇の心に躰の惠明無きが故に无明と曰う」となる。

以上の解釈から分かるように、無明住地の解釈についても各疏各様で、A本では、直接に理を知らないことを「無明住地」とし、B本では、真理を知らないことを「無明住地」とし、C本では、無明とは、如実知ではなく、邪なる分別心、假名を逐うこと、拠り所において暗くすることを「無明住地」とし、D本では、〈無始〉とは、神識は起きない。起すれば、境に託す。境に託して了せざることを「無明住地」とし、E本では、解釈がなく、F本では、愚闇の心に躰恵明ないことを「無明住地」としている。

1-4. 煩惱の分け方について

(一) A本とC本とF本の関係について

A本には

見一処
愛（欲・色・有）
無明

B本には

四住
起煩惱
恒沙
上
無明住地

C本には

見一処
愛（欲・色・有）
無明

D本とE本には、煩惱の分け方については解釈されていない。

F本には

見一処
愛（欲・色・有）
無明

以上、煩惱の分け方から見ると、一つの流れが見える。つまり、A本→C本→F本である。これらの三本とも、煩惱を三つに分けている。つまり、

見一処

愛（欲・色・有）

無明

の五住地三分説である。また、この煩惱の分け方からもう一つの注意点がある。それは、B本の特異な分け方である。B本は煩惱を五つに分けているが、通説の四住地と無明住地の五住地説とは異なり、「四住、起煩惱、恒沙、上、無明住地」の五つに分けている。

(二) C本とD本とE本の関係について

C本には、生死と煩惱について次の文がある。

一生死有餘，二種死是也。二煩惱有餘，無明住地是也。三業有餘，二種業是也。四菩提有餘，從世尊，有愛住地已下是也。五涅槃有餘，從世尊，阿羅漢辟支佛最後身已下是也（『藏外地論宗文獻集成続集』p.388、金剛大学校、仏教文化研究所、2013年）

とある。書き下せば、「一には生死有餘、二種の死は是れなり。二には煩惱有餘、無明住地は是れなり。三には業有餘、二種の業は是れなり。四には菩提有餘、〈世尊、有愛住地〉より已下は是れなり。五には涅槃有餘、〈世尊、阿羅漢辟支佛最後身〉より已下は是れなり」となる。

つまり、五つに分けている。

一、生死有餘

二、煩惱有餘

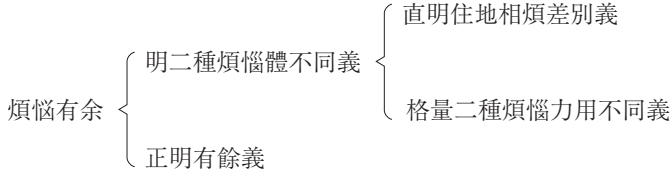
三、業有餘

四、菩提有餘

五、涅槃有餘

さらに、この五つの有餘をそれぞれ解釈している。まず、生死有餘において、二種生死を解釈する。次に、煩惱有餘の部分に、「就煩惱中，有二子句。從初至“亦令四種煩惱久住”，直明二種煩惱體不同義。二從“阿羅

漢”已下，訖“最為大力”，正明有餘義」とある。また、「就明煩惱不同中，復分為二。從初至“心不相應無始無明住地”，直明住地相煩差別義。二從“世尊，此四種住地”已下，訖“煩惱久住”，格量二種煩惱力用不同義」とある。図示すれば、次のようである。

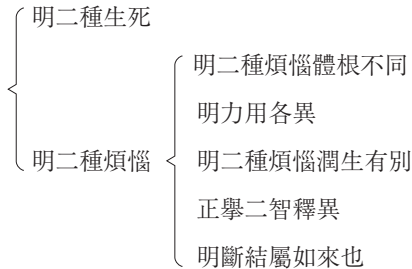


業有余の後に、菩提有余において、「明如來能斷，非二乘」とあり、最後に涅槃有余を解釈する。

さて、D本ではこの部分についてどう解釈しているかをみてみよう。まず、「就中有兩段明義。一明二種生死。二明二種煩惱」（『大正藏』vol. 85, p. 269c13-14）とある。この部分を大きく二つに分けている。

- 一、明二種生死
- 二、明二種煩惱

「明二種煩惱」をさらに五つに分けている。「第二就兩種煩惱明釋異。就中有五段文句明義。第一從何等為二以下。無始無明住地明二種煩惱體根不同。第二從世尊此四住地以下。就最為大力明力用各異。第三從又如取縁以下。訖即是無明住地明二種煩惱潤生有別。第四從羅漢最後身菩薩以下。訖解脱味正舉二智釋異。第五從無明住地不斷以下。訖智師子吼明斷結屬如來也」とある。図示すれば、次のようである。



生死と煩惱の部分について、以上の分析から、C本とD本とは、相承関係があることが見えてきた。即ち、

C本の「生死有余」とD本の「明二種生死」との対応

C本の「直明二種煩惱體不同義」とD本の「明二種煩惱體根不同」との対応

C本の「格量二種煩惱力用不同義」とD本の「明力用各異」との対応

C本の「明如來能斷、非二乘」とD本の「明斷結屬如來也」との対応

この四つの対応から、C本とD本とは緊密な関係があると考えられる。そして藤枝晃氏も「C本、D本は、あまり離れない時期に、近い系統の学派によって作られた注釈書である」¹¹と指摘している。

次に、E本はこの部分についてどう解釈しているかを見てみよう。まず、第四。擧二種煩惱。以釋第三生死有二種也。釋云。夫生死必因煩惱。煩惱必致生死。二乘已斷之惑。既感分段。未除之累。理招變易。所以生有二也。亦即釋第二段。既有煩惱。二乘所不能斷。故四智未備。佛能永除。所以究竟。亦即釋第一段。二乘斷一。故佛昔與。未斷其二。故勝鬘今奪。(古泉圓順 前掲論文、p. 92, ll. 362-366)

とある。書き下せば、「第四に、二種煩惱を擧げて、以て第三の生死に二種有るを釋すなり。釋して云く。夫れ生死は必らず煩惱に因り、煩惱は必らず生死を致す。二乗の已に斷ずる惑は、既に分段を感ず。未だ除かざる累は、理に變易を招く。所以に生に二有るなり。亦た即ち、第二段の既に煩惱有り、二乗の能く斷ぜざる所の故に四智は未だ備えず。佛は能く永く除く所以は究竟なりを釋す。亦た即ち第一段の二乗は一を斷ずる故に佛昔「與」なり。未だ其の二を斷ぜざるが故に勝鬘今「奪」なりを釋す」となる。つまり、二種煩惱を挙げ、それによって上の二種生死を解釈している。また、煩惱について、以下の解釈がある。

第一、正明二種煩惱體相

¹¹ 藤枝晃 前掲論文、p. 340.

第二、格量煩惱力用勝負

つまり、C本無名氏『勝鬘經疏』とD本照法師『勝鬘經疏』とE本敦煌本『勝鬘義疏本義』の相似点は二つある。

(1) 煩惱についての解釈の語句はかなり似ている。図示すれば、

①	{	C本 明二種煩惱體根不同
	{	D本 明二種煩惱體根不同
	{	E本 正明二種煩惱體相
②	{	C本 格量二種煩惱力用不同義
	{	D本 明力用各異
	{	E本 格量煩惱力用勝負

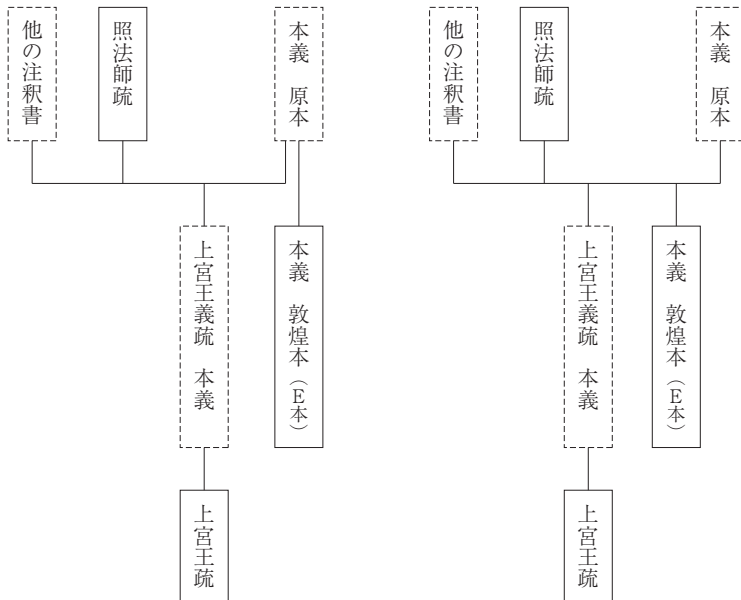
(2) もう一つは構造上の相似点である。つまり、C本とD本は各章をいくつかの大段落に分け、大段落を中段落に、中段落をさらに小段落に分けるという形となっている。E本はC本、D本よりも、その小段落をさらに二重か三重の小段落に区切っていて、極端な場合はただ二字の句まで分解している。

上の二点から見ると、この三本は同じ系統であるとはいえないが、少なくとも、煩惱については、C本とD本からE本への影響が大きいと思われる。

また、E本敦煌本『勝鬘義疏本義』の伝承について、古泉圓順氏¹²は、「『上宮王義疏』が「本義」と呼ぶものは、すべて『奈93』本に見出される。しかし、『奈93』が即ち「本義」であるとは言い切れない。なぜなら、一面において不同の個所もいくつかあるのである。その不同の個所の若干は『照法師疏』に合致する。しかし、これに合致しないところもあって、『上宮王義疏』には、『奈93』本以外の源流が認められるが、それが誰の

¹² 古泉圓順 前掲論文、pp. 68-69.

何という著作であるかは明らかではない。つまり、E本は『上宮王義疏本義』の直接の本義ではない。ただE本と『上宮王義疏本義』とは同祖の原本より出たものである。この原本が西に伝えられ、敦煌写経群中の『奈93』『玉24』本（E本）となり、一方これと祖を一にする『本義』によって『上宮王義疏』の撰述がなされたのである」と述べている。つまり、古泉円順氏は『上宮王義疏』が『本義原本』、『照法師疏』とそのほかの誰かの注釈書によって作られたもので、E本がただ『本義原本』のみによって作られたものであると指摘している（次の左図）。私の上の検討に随えば、E本の伝承については少し改める必要がある。つまり、『上宮王義疏』だけでなく、E本も『本義原本』以外に『照法師疏』とそのほかの誰かの注釈書によって作られたものである（次の右図）。



2. 二種生死の検討（変易生死を中心として）

次に、『勝鬘經』における二種生死の変易生死を受けるものの階位問題を明らかにしたい。なぜなら、菩薩の階位を經典解釈の中に持ち込むことは、南北朝を通じて行われていたようだからである。一語一句の上に乗る階位を問題とする釈風は、南北朝期の特徴といえよう。ただ、分段生死は普通の三界の生死であるので、ここでは論じない。声聞、縁覚、大力菩薩の三乗を取り上げて、南北朝時代の仏教者たちがその階位をどう解釈しているかを明らかにしたい。

さて、經中最初に三乗が登場する不思議変易生死を説明する一乗章中の記述を検討しよう。一乗章には、

有二種死。何等爲二。謂分段死。不思議變易死。分段死者。謂虛僞衆生。不思議變易死者。謂阿羅漢辟支佛大力菩薩意生身乃至究竟無上菩提（『大正藏』 vol. 12, p. 219c20-23）

とある。書き下せば、「二種の死有り。何等をか二と爲す。謂く分段死と不思議變易死となり。分段死とは、謂く虚偽の衆生なり。不思議變易死とは、謂く阿羅漢と辟支佛と大力菩薩との意生身にして乃し無上菩提を究竟するに至るまでのものなり」となる。つまり、分段死を有するのは虚偽衆生であり、不思議變易死を有するのは阿羅漢辟支佛大力菩薩意生身である。では、これから、諸注釈書の検討にうつる。

A 本における二乗と大力菩薩の階位

二乗についての位置づけはなされていない。大力菩薩の階位について、

前大力菩薩八住以上。今最後身。即法雲之末。前說無明潤生如顯故。

以大力爲初。令窮無明之末。明後身不盡故。於佛地不得知覺心也（『大正藏』 vol. 85, p. 279c27-28）

とある。書き下せば、「前の大力菩薩は八住以上なり。今の最後身は即ち法雲の末なり。前に無明潤生を説いて始めを顯わすが故に、大力を以て初めと爲す。（大力）をして、無明の末を窮めしむ。後身不盡を明かすが故に、佛地に於いて知覺の心を得ざるなり」となる。

上の注釈から、大力菩薩は八住以上の菩薩であるが、修行の階位（十信、

十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺) の中ではかなり低い。ただし、十住と十地は混用される例があるので¹³、この「八住」は「八地」のことともいえよう。そして、二乗の階位についての解釈はなされていないが、大力菩薩の階位から見れば、二乗は八地（住）以下であることは間違いない。

B 本における二乗と大力菩薩の階位

解釈は行われていない。

C 本における二乗と大力菩薩の階位

二乗と大力菩薩の階位について、

“變易死”，從初地竟，五地已還，名聲聞地。六地緣覺地。七地已上，大力菩薩地。此三人皆受意生身。三地已還，三昧意生。四地至七地，覺法自在意生身。八地已上，種類無形作俱生意生身。¹⁴ “阿羅漢”明諦修，“辟支佛”緣諦修，“大力菩薩”明中道實修。以三修故，成就三種意生身。“乃至究竟無上菩提”者，明金剛已還，皆受此三種身也（『藏外地論宗文獻集成統集』 p. 389）

とある。書き下せば、「變易死は、初地の竟りより五地の已還を聲聞地と名づく。六地は緣覺地なり。七地已上は大力菩薩地なり。此の三人は皆意生身を受く。三地已還は、三昧の意生身なり。四地より七地に至るは覺法自在意生身なり。八地已上は種類無形作俱生意生身なり。阿羅漢は諦修を明かす。辟支佛は諦修に緣る。大力菩薩は中道實修を明かす。三修を以て

¹³ 『十住毘婆沙論』（*Daśabhūmivibhāṣāśāstra）中の十住は「十住」への注釈ではなく、『華嚴經』の「十地品」への注釈である。つまり、鳩摩羅什は「十地」に当たるサンスクリット語 daśabhūmi を「十住」と訳した。この疏の十住の語も、また十地とも訳すべきであろう。

¹⁴ 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』卷三に「佛告大慧，有三種意生身。云何為三。所謂三昧樂正受意生身，覺法自性性意生身，種類俱生無形作意生身」（『大正藏』 vol. 16, p. 497c19-c22）とある。（『大正藏』 vol. 16, p. 497c19-c22）この注釈書のこの部分が『楞伽阿跋多羅寶經』に依拠していることが分かるが、三種意生身の十地への当てはめ方は『楞伽阿跋多羅寶經』（三昧樂正受意生身——三地、四地、五地、覺法自性性意生身——八地、種類俱生無形作意生身——覺一切佛法緣自得樂相）に依拠せず、自分の見解で当てはめている。すなわち、三昧意生——三地以前、覺法自在意生身——四地から七地まで、種類無形作俱生意生身——八地以上である。

の故に、三種の意生身を成就す。〈乃至究竟無上菩提〉とは、〈金剛已還〉は皆此の三種の身を受くるを明かすなり」となる。

阿羅漢・辟支仏・大力菩薩三乗を菩薩の十地に当てはめている。すなわち、初地から五地までは声聞地で、六地は縁覚地で、七地以上は大力菩薩地である。この注釈書は三乗を十地の菩薩に当てはめていることがわかった。

D 本における二乗と大力菩薩の階位

この注釈書にも二乗と大力菩薩の階位についての解釈は行われていない。

E 本における二乗と大力菩薩の階位

二乗と大力菩薩の階位について、この注釈書には、

八地已上。身無形色。命無期限。但以明代闇。以新易故。刹那改変。
故名変易。非下地所測。称不思議也（敦煌本『勝鬘義疏本義』316-319
行）

とある。書き下せば、「（この不思議変易生死は）八地以上なり。身に形色無し。命に期限無し。但だ、明を以て、闇と代わり、新を以て、故に易え、刹那に改変するが故に、変易と名づく。下の地の測る所に非ざるを不思議と称するなり」となる。

つまり、八地以上の身体には、形と色がなく、命も無限であり、ただ暗いものが明るいものに、古いものが新しいものに変わるので、変易というのである。七地以下がこの八地以上を推測できないので、不思議というのである。即ち、八地以上は不思議変易生死を受ける。また、二乗と大力菩薩も不思議変易生死を受けるので、両者とも八地以上であることは明らかであろう。本注釈書には、また

今言二乗変易生死者。以昔是二乗。転爲菩薩。於七地中。具修万行。
登於八地。受変易生。何¹⁵昔本名。言二乗之人。受変易生。実八地
也。（敦煌本『勝鬘義疏本義』348-350行）

とある。書き下せば、「今二乗の変易生死と言うは、以て昔是れ二乗なり。転じて菩薩と爲す。七地の中に於いて、具さに万行を修して、八地に登り、

¹⁵ 何 認に通ず。ここで、「認め」の意を取った。

変易生を受くる。昔の本名を認め、二乗の人を言う。変易生を受け、実は是れ八地なり」となる。つまり、今の変易生死を受ける二乗は昔はただの二乗だが、今、菩薩になって、七地において多くの修行をして、そして八地にも登り、変易生死を受け、二乗は実は八地であるという解釈である。F 本における二乗と大力菩薩の階位

この注釈書には、

誰是大力。所謂種性解行菩薩。彼有何義。二輪煩惱。全未斷除。而不為彼煩惱所牽。又於三界。受生自在。故名大力（『新纂大日本統藏經』 vol. 19, p. 881c5-7）

とある。書き下せば、「誰か是れ大力、所謂種性解行の菩薩なり。彼に何の義有らん。二輪の煩惱、全て未だ斷除せず、而るに彼の煩惱に牽せられず。又三界に於いて、自在に生を受くるが故に大力と名づく」となる。

つまり、大力菩薩はまた種性解行菩薩ともいう。二種類の煩惱は全て断じられていない。しかし、煩惱に束縛されておらず、三界において自由自在に受生できるので、大力というのである。即ち、慧遠は大力菩薩を種性解行菩薩と見なしていて、そしてこの大力菩薩は三界の中に、自由自在に受生できるが、まだ、三界の外に出てきていない。

また、意生身の解釈では、

意生身者。是初地上一切菩薩。彼人受生無礙自在。如心如意。名意生身…地上菩薩受生如是（『新纂大日本統藏經』 vol. 19, p. 881c18-21）

とある。書き下せば、「意生身とは、是れ初地の上の一切菩薩なり。彼人は受生するに無礙自在なり。如心如意なるを意生身と名づく…地上の菩薩受生するは是くの如し」となる。つまり、意生身は初地以上の菩薩であり、自由自在に受生できるので意生身という。また、二乗と大力菩薩とも意生身をもっているのが、初地以上の菩薩である。

以上の六本の注釈書以外、もう一本を参照しなければならない。それは、吉蔵の『勝鬘寶窟』である。この注釈書には、

大力菩薩且有二種。一直往大力。二迴小入大名爲大力。言大力者。以不爲業繫。自在受生。故言大力。問。云何是大力菩薩位耶。答。有人

言。所謂種姓菩薩。所以然者。二障煩惱。都未斷除。而不爲煩惱所牽。又於三界受生自在。故名大力。此師雖云種姓受變易。而未判是何種姓。有人言。地前菩薩。能作五生。稱爲大力。地前位通。且未分判是地前何位。依三藏釋攝大乘及仁王經並云。十行菩薩斷惑。與二乘齊。即十行之人。爲大力菩薩也。此大意同前二師。而判位在於十行。有人言。六地猶屬分段。六地終心。三界報盡。便受變易。正取此經證。有人言。有四種生死。一流來生死。謂初託空。起一念識。二分。三中間生死。二乘無學。四變易。七地所受餘習爲因。不生三界。未至法有。故中間生死。二乘無學。三界報盡。同生中間。聞法華等經。轉爲菩薩。習行滿於七地終心。入八地法流。乃名變易。故以六地分段。七地受中間。八地受變易。有人言。不立四種生死。但立分段變易二種生死。六地爲分段。七地已去爲變易也。今謂位義難知。憶生罪過。不可定判也。若依法華論數處分明。又明地前是凡夫受分段身。捨分段身方入初地。則知初地已去是變易生死大力菩薩也。（大正藏 vol. 37, p. 49a27-b22）

とある。書き下せば、「大力の菩薩にも且つ二種有り。一には直往の大力、二には迴小入大を名づけて大力と爲す。大力と言うは、業に繫せられず、自在に生を受くるを以ての故に大力と言う。問う、云何が是れに大力の菩薩の位になるや。答う、有人言く、「所謂、種姓の菩薩なり。然る所以は、二障の煩惱、都て未だ斷除せず、而して煩惱の爲に牽かれず。又、三界に於いて受生自在なり。故に大力と名づく」と。此の師は種姓は變易を受くと云うと雖も、而も未だ是れ何の種姓なるかを判せず。有人言く、「地前の菩薩は能く五生と作るを稱して大力と爲す」と。地前の位なることは通ず、且く未だ是れ地前の何の位と分判せず。三藏の釋に依るに、『攝大乘』及び『仁王經』並びに云く、十行菩薩、斷惑、二乘と齊し。即ち十行の人を大力の菩薩と爲すなり。此の大意は前の二師に同じ、而も位を判ずることは十行に在り。有人言く、「六地は猶お分段に属す。六地の終心に三界の報盡きて便ち變易を受く」と。正しく此の經を取て證せり。有人言く、「四種の生死有り、一には流來生死、謂く初め空に託して一念の識を起す。二には分段。三には中間生死、二乗の無學なり。四には變易、七地所受の餘習を因と爲し、三界に生ぜず、未だ法流に至らざるが故に中間生死あり。

二乗の無學は三界の報盡きて、同じく中間に生じ、『法華』等の經を聞いて、轉じて、菩薩と爲り、習行滿ちて七地の終心に於いて、八地の法流に入る。乃ち變易と名づく。故以に六地は分段、七地は中間を受け、八地は變易を受く」と。有人言く、四種の生死を立てず、但だ分段變易の二種生死を立て、六地を分段と爲し、七地已去を變易と爲すなり。今謂く位の義、知り難し。罪過を生ぜんことを憶えば定判すべからざるなり。若し『法華論』に依らば、「數處に分明なる文あり。明さく、地前は是れ凡夫、分段身を受く。分段身を捨て、方に初地に入る」と。則ち、初地已去は是れ變易生死の大力の菩薩なりと知る」となる。

吉藏は様々な先学の説（大力菩薩は種姓菩薩、地前菩薩、十行菩薩などである）を列挙して、「この大力菩薩の階位を知るのは難しいから、罪を犯す恐れがあり、判断できない」と述べ、それから、「もし法華論によれば、初地已去は變易生死の大力菩薩である」と述べ、自分の考え方を明らかにした。乃ち、初地以前は凡夫で、分段身を受ける。初地以後は分段身を捨て、變易生死であり、大力菩薩である。

以上をまとめると、(1) B本とD本には解釈はなされていない。(2) A本では、二乗を八住(地)以下、大力菩薩を八住(地)以上の菩薩とみなしている。(3) E本では、二乗と大力菩薩とも八地以上と積している。(4) C本では初地から五地までを声聞地、六地を縁覺地、七地以上を大力菩薩地とみなしている。(5) F本では、二乗と大力菩薩は初地以上の菩薩であると積している。(6) 吉藏の『勝鬘寶窟』では、大力菩薩の階位について、いくつかの観点（大力菩薩は種姓菩薩、地前菩薩、十行菩薩などである）を列挙してから、『法華論』によって、初地以前は凡夫で、分段身を受ける。初地以後は分段身を捨て、變易生死であり、大力菩薩である。また、二乗も變易生死を受けているので、初地以後であると解している。

二乗と大力菩薩の階位から見ても、C本からF本へ、そして吉藏の『勝鬘寶窟』へという流れが見える。つまり、この三本とも、二乗と大力菩薩を初地以上だとみなしている。

おわりに

以上、勝鬘經の煩惱論に関して、六本の注釈書の煩惱部分を検討し、以下の五点に示すような結果を得た。

第一、住地煩惱の解釈について

(1) 住と地の解釈、住について、各書各様で、地については各書は同じ解釈をなされている。即ち、「能生」の義を取った。

(2) 四住地の解釈について、見一処住地についての解釈は、各書各様である。A本では、「異理を妄執する」と解釈している。B本では、解釈されていない。C本では、四諦平等で、異なる相がないことを「一」となし、解心の栖託を「処」となし、照達して、明らかにすることを「見」となしている。D本では、三界の見諦は麤礦で、潤生の義は等しく、見諦をもって斷ずるので、「見一処」と言うのである。E本では、解釈されていない。F本では、五利の煩惱（身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見）を「見一処」となしている。欲愛住地、色愛住地と有愛住地についての解釈は各書ほぼ同じで、即ち、欲愛住地を欲界の煩惱とし、色愛住地を色界の煩惱とし、有愛住地を無色界の煩惱としている。

(3) 無明住地の解釈は、A本では、直接に理を知らないことを「無明住地」とし、B本では、真理を知らないことを「無明住地」とし、C本では、無明とは、如実知ではなく、邪なる分別心、假名を逐うこと、抛り所において暗くすることを「無明住地」とし、D本では、〈無始〉とは、神識は起きない。起すれば、境に託す。境に託して了せざることを「無明住地」とし、E本では、解釈がなく、F本では、愚闇の心に躰恵明ないことを「無明住地」としている。

第二、煩惱の分類について

A本、C本とF本との分け方が一致している。即ち、大きく

見一処

愛（欲・色・有）

無明

の三つに分けている。また、時代順から考えると、A本→C本→F本と

いう流れが明らかになった。

第三、特に B 本の分類について

B 本は煩惱の分け方が特異である。即ち、煩惱を五種に分けているが、従来の五住地（見一処住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地、無明住地）とは違って、四住地、起煩惱、恒沙、上、無明住地の五種に分けている。さらに、五つの名があるけれども、実は（四住地と無明住地の）二つしかないという。また、「八地から十地に至るを闡障するを名づけて無明と爲す」によって、無明住地煩惱を八地から十地にかけての修行者の煩惱としている。この二点は後の注釈書に見いだされない。

第四、C 本、D 本、E 本の関係について

三者の相承関係を表している点は二つある。これは繰り返しになるが、一応まとめて述べよう。一つ目は煩惱についての解釈の語句がよく似ているという点である。即ち、

- | | | |
|---|---|-----------------|
| ① | { | C 本 明二種煩惱體根不同 |
| | | D 本 明二種煩惱體根不同 |
| | | E 本 正明二種煩惱體相 |
| | | |
| ② | { | C 本 格量二種煩惱力用不同義 |
| | | D 本 明力用各異 |
| | | E 本 格量煩惱力用勝負 |

二つ目は、この三本の全体の構造の類似点である。つまり、C 本と D 本は各章をいくつかの大段落に分け、大段落を中段落に、中段落をさらに小段落に分けており、E 本は、その小段落をさらに二重か三重の小段落に区切っていて、極端な場合はただ二字の句まで分解している。

以上の二点から見ると、この三本は同じ系統であるとはいえないが、少なくとも、煩惱については、C 本と D 本が E 本に与えた影響は大きいと考えられる。

第五、二乗と大力菩薩の階位について

B本とD本は二乗と大力菩薩の階位に触れていなかった。A本は二乗の階位については解釈していないが、大力菩薩を八住（地）以上であると主張している。C本は初地から五地までは声聞地で、六地は縁覚地で、七地以上は大力菩薩地であると主張している。E本は二乗と大力菩薩とも八地以上であると主張している。F本は意生身は初地以上の菩薩であり、自由自在に受生できるので意生身という。また、二乗と大力菩薩とも意生身をもっているため、初地以上の菩薩である。吉蔵の『勝鬘宝窟』は大力菩薩の階位について、いくつかの観点（大力菩薩は種姓菩薩、地前菩薩、十行菩薩などである）を列挙してから、『法華論』によって、初地以前は凡夫で、分段身を受ける。初地以後は分段身を捨て、變易生死であり、大力菩薩である。また、二乗も變易生死を受けているため、初地以後であることを明らかにした。以上の分析から、この三本とも二乗と大力菩薩を「初地以降」の階位にあると主張していることが判明した。即ち、C本からF本へ、そして吉蔵の『勝鬘宝窟』へという流れが見える。これは先の第二の「C本→F本」と一致している。

以上のような諸注釈に見られる解釈は、それぞれの学派の立場に立って行われたものであるが、それが中国仏教者における本經に対する理解と受容の特色を表しているものであると思われる。中国仏教はインド仏教史を忠実になぞることによって発展したのではなかった。經論や思想の伝来が多分に偶然性に依存し、それ故に、インド仏教にはない教相判釈というものが発達せざるを得なかったところに、中国なりの特徴がある。

参考文献

- 『敦煌劫余録』陳垣編，国立中央研究院歴史語言研究所，中華民國 20（1931）。
- 香川孝雄「『勝鬘經』における煩惱説の成立」『浄土教の思想と文化：恵谷隆戒先生古稀記念』仏教大学 1972, pp. 1045-1066.
- 柏木弘雄『勝鬘夫人のさとり』春秋社，1997.
- 金治勇「敦煌発見の勝鬘經疏（奈 93）と勝鬘經義疏との比較研究（2）——主としてその学系について——」『印度学仏教学研究』37, 1970, pp. 270-273.

古泉圓順「敦煌本『勝鬘義疏本義』」『聖徳太子研究』5, 1970, pp. 59-141.

藤井教公「『勝鬘經』の世界——中国如来蔵思想史研究の手がかり——」『横浜市立
大学論叢人文科学系列』34-1, 1982, pp. 25-49.

藤枝晃「北朝における『勝鬘經』の伝承」『東方学報』40, 1969, pp. 325-349.

Summary

The Theory of Defilements in the Northern and Southern Dynasties Chinese Buddhism: Focusing on Several Commentaries on the *Śrīmālādevīsīṃhanādasūtra*

YANG Yufei

The *Śrīmālādevīsīṃhanādasūtra* 勝鬘師子吼一乘大方便方廣經 (hereafter, SMS) is one of the earliest *tathāgatagarbha* scriptures. The exegetical literature dedicated to the text helps elucidate some important concepts concerning not only the *tathāgatagarbha* doctrine but also its specific theory of defilements. In this paper, I discuss the peculiar interpretations of defilements in six Chinese commentaries composed during the Northern and Southern Dynasties, focusing especially on relationship between the *vāśabhūmi* and the *jātimaraṇa*.

Section 1 is an introduction to the theory of defilements in the SMS. Section 2 surveys the six commentaries on the SMS written during the Northern and Southern Dynasties. Section 3 deals in detail with the theory of defilements by examining the concepts of *vāśabhūmi* and *jātimaraṇa*.

The comparative analysis of these six commentaries on the SMS sheds light not only on the theory of defilements in the *sūtra* but also on the doctrinal developments brought by the Chinese exegetes of the Northern and Southern Dynasties.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

*Research Fellow,
the Research Centre
for East Asian Buddhism
Minzu University of China*